

「子どもたちを見守り育てる」

教育研究所所長補佐兼企画係長
金子 強

夏のある日のこと、出発間際の電車にあわてて乗り込んできた親子が、ほっとした様子で目の前の座席に座った。年少くらいの妹のほうが母親にタオルで顔を拭かれながら、待ちきれない様子で靴を脱ぎ、膝立ちで窓の方へと体を向けた。母親は同じタオルで小学校1年生くらいのお兄ちゃんのおでこ鼻のあたりを勢いよく拭き上げながら、「お兄ちゃん、靴を揃えてあげてね。」と優しく声を掛けた。お兄ちゃんは、こちらを少し気にしながらも、すぐに自分の靴を脱いで座席に腹ばいになり、二組の靴をきちんと揃えた。そして、母親の「ありがとう。」の言葉に満足したようすで、自分も窓枠に指をかけながら、妹の隣に肩を並べた。何気ない日常の一風景であったが、私は温かい気持ちにさせられるとともに、母親の言葉かけや子どもの姿に感動を覚えた。母子の一連の行動から、靴を揃えるという約束やお兄ちゃんとして妹を気遣うやさしさ、普段から子どもへしっかり注がれている母親の愛情などを感じ取ることができた。

「働く幸せ」の著者、日本理化学工業の大山泰弘さんはその著書の中で、「人の幸せ」とは、「人に愛されること」「人にほめられること」「人の役に立つこと」「人に必要とされること」だという、ある住職の話を紹介している。人は人とかかわる経験を重ねて、温かい心や人のために行動する喜びを知り、豊かな人間性やしあわせに生きていく智恵を育んでいくように思う。

平成22年度「生活や学習に関する調査」結果によると、「自分にはよいところがあると思う」と答えたさいたま市の子どもの割合は、全国や大都市と比べてとても高い。また、同様に「人が困っているときは進んで助けている。」と答えている割合も高く、周りに対する優しさも普段の生活の中で醸成されていることもうかがえる。

「自尊感情」や「思いやり」は、周りの人との豊かななかかわり合いを通して育まれるものである。「子どもは学校で学び、地域で育つ」というように、子どもたちがかかわり合う体験は、学校から地域へと広がりをもたせることで、「価値のある自分」に成長させることができる。それゆえ、地域の大人が声をかけたり、ほめたりして子どもと繋がるのが、子ども的人格形成に大きな役割を果たすことになる。

さいたま市では、「土曜チャレンジスクール」や「放課後チャレンジスクール」「学校安全ネットワーク」を始めとして、学校を支える地域の協力の輪が徐々に広がりを見せている。地域の様々な場面で、大人が子どもたちを見守り、かかわり、育てていただいていることへの期待が益々、膨らんでいる。